episode 17　息子の心に根付いたライオン

投稿者　柳田 かや乃 さま（京都府）

『ラチとらいおん』
マレーク・ベロニカ 作・絵
とくながやすもと 訳
福音館書店　1965年

1993年生まれの長男は、3人の子どもの中で一番小さく生まれ、気も弱げで引っ込み思案でした。私はこの長男があまりにも小さくてものおじし、自信を持てず、心もとない子だと思っていました。

私自身、絵本は大好きでした。本の力をとても大きなものと思っていました。
出産の前後には、必ずその上の子に絵本を数冊買いました。1998年3番目の次女の出産の際には、「長男が勇気を出すことに興味を持ってくれるかもしれない」とのインスピレーションを感じた、『ラチとらいおん』を購入したのでした。
この時はそんなに深く考えずに渡したその本を、彼は高校生になっても持っていました。
ある時、書店で『ラチとらいおん』の小さなマスコットが売られていて、懐かしくて買って持っていました。
長男が高校の時に、そのマスコットが出てきて、彼に「これいる？」と聞いたら、「いる」と言うので渡しました。

時は過ぎて2022年8月、彼が29歳になる夏です。
ニュージーランドで騎手になったかつての小さな弱気の男の子は、反対を押し切って単身競馬騎手の世界にダイブし、事もあろうに着々とその実績を積んでいきました。
日本を離れる際に「有名になるまでは帰らない」と言うので、どういう意味なのかと思いました。
「中学から不登校、大学中退までの青春の軌跡を、他の同級生に見合う自分を創生確立するまでは帰らないよ」という意味だったと後で聞いて、その時の決心の強さ、その後の自己管理の凄惨な日々を知って呆然としたものです。

2023年春G（重賞）レースで2勝した彼は、見習いジョッキーから晴れてシニアジョッキーになって3ヶ月、さあこれからという時、後ろから追ってきた無謀なジョッキーの仕掛けにより落馬しました。
ICUで6日間、意識は戻らず、そのまま帰らぬ人となりました。私は絶望のうちに彼の部屋を片付けに行きます。
そして荷物の中から、あの『ラチとらいおん』の赤いライオンを見つけました。「守ってくれたらよかったのに」と言いそうになって、帰国してから本を抱きしめて何度も何度も何度も泣きました。
小学生の彼の甥がそのマスコットを欲しいと言うので、ライオンの人形を手作りして渡しました。
この絵本から生まれたライオンの連鎖は、彼の甥にも、私にも特別格別となっています。

「絵本の日アワードin FUKUOKA 2023」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

ここにもあった！ 60年のロングセラー

怖がりであったり、気弱であったり、臆病な子どもに、なにがしかの勇気を与える『ラチとらいおん』は、子どもだけでなく、子育て中のお母さんも共感して心がラクになれる魔法の絵本です。

作者のマレーク・ベロニカ氏は、ハンガリーの女性作家です。『ラチとらいおん』が本国ハンガリーで出版されたのは1961年で、すぐに英語やドイツ語に翻訳され、日本では1965年に邦訳版が出版されました。すなわち2025年に、日本語版発行60周年を迎えるロングセラーなのです。

出版から60年が経っても色褪せることなく、現代の親子に求められ、勇気という力を与えているエネルギッシュな絵本というわけです。

松居 直氏の慧眼力は、神の域！

『ラチとらいおん』を日本に連れてきたのは、当時の福音館書店編集長・松居 直氏です。1963年にドイツはフランクフルトのブックフェアで原書を目にした松居氏は、絵本に「ひきよせられるようだった」と語っています。「ハンガリー語はまるで読めませんでしたが、ページをめくるだけで『これはいい本だ！』と確信できました」と、マレーク氏来日記念記事で明かしているのです。

2005年に初来日したマレーク氏は、「日本のみなさんには本国ハンガリーで愛される以上に、このお話を愛してもらっていると感じています」と、福音館のインタビューで応えています。なおも、「不思議なことにこの本は、日本人にとって何かとても大切な、心に響く意味のあるものみたい」と分析しているのです。確かに、『ラチとらいおん』には日本人の心が備わっていると感じます。

ラチと似ている日本の子どもがいた！

引っ込み思案で内気なわが子に気をもむ保護者が、「勇気や自信をもってほしい」と願うのは常でしょう。『ラチとらいおん』では、気弱なラチ少年をらいおんがコーチングするうちに、自己効力感を高めていく過程が子どもの目にもシンプルに伝わります。ラチに自分を投影する子どもには、「自分もラチのようになれる」という自信が湧いてくるような描かれ方になっているのです。そう、日本人に受け入れられるのは、ラチとのび太が重なるからではないでしょうか。

また、社会性がベースになければ、「強くなる」ことの自己効力感が真の意味での「勇気」にはつながらないことを何気なく語っているのです。お話のなかでラチが「自信」をもちはじめ、やがて「勇気」を身につけていくのは、社会との関わりや利他的行動における達成感の経験を通してです。解説なしに、子どもたちが解釈できるつくりになっているのです。臆病な子どもたちには、赤いらいおんまでもほしいと思えるお話でしょう。

日本でもハンガリーでも楽しめる

マレーク・ベロニカ氏は1937年、ブダペスト生まれで、17歳のときに一晩で初めての絵本を描き上げるのです。その作品を見た父親が出版社へ持って行くと、編集長の眼に留まり、出版が決まりました。そのときのお話『ボリボン』が、絵本作家デビュー作です。マレーク氏18歳のときのことでした。

そして翌年、19歳のときに『ラチとらいおん』を描いたのです。それから68年、マレーク氏は、今年2024年12月19日のお誕生日に87歳を迎えられます。『ぐりとぐら』や『魔女の宅急便』がハンガリーでも楽しまれているように、『ラチとらいおん』は日本の子どもたちには、母国のお話として受け止められ、成長の力となっているのです。これから先も生きる力となるでしょう。

文献

1）「母の友」編集部 編：『ラチとらいおん』の作者マレーク・ベロニカさんがやってきた，母の友（628），pp.75-87，2005.
2）絵本ナビ編集部 編：「ブルンミとアンニパンニ」シリーズ マレーク・ベロニカさんインタビュー，絵本ナビHP https://www.ehonnavi.net/ 2014/07/03